

開会挨拶

時任 宣博 (京都大学理事・副学長)



皆さま、おはようございます。研究、評価、産官学連携担当の理事・副学長を務めております、時任でございます。本日は、本学の湊長博総長が、用務のため午後からの参加とさせていただきますので、第17回京都大学附置研究所・センターシンポジウムの開催に際し、本学を代表しまして、私からひと言ご挨拶申し上げます。

一昨年から猛威を振るっております、新型コロナウイルス感染症、COVID-19ですけれども、本年に入りましても第6波の全国的な感染拡大に見舞われておりまして、皆さまも、なかなか先が見通せない、落ち着かない毎日をお過ごしのことと思います。

そのような中ですけれども、感染拡大防止に万全の対策を練りつつ、愛媛県松山の地で第17回のシンポジウムを開催させていただきますこと、私どもとしましては非常に嬉しく思っております。

このパンデミックに限らず、今、私たちは気候変動、またそれに伴う大規模な自然災害をはじめ、大きな地球環境の変化、少子高齢化による社会構造の変化など、いろいろ問題を抱えております。私たちの暮らしますこの社会の持続可能な発展を目指すという意味では、重大な試練の時を迎えていると考えております。

我々が従来、それによって立ってきました生活様式とか考え方だけでは、この試練・問題は解決できないと思っております。そのような中で、科学技術や学術の革新的な発展・進歩はとても重要であると思っております。さまざまな研究領域で研究活動を行っております私たち大学も含めて、アカデミアの研究者が担う責任は非常に重いとの自覚を強く持っているところでございます。

地球環境、人口社会構造の変化などは、まさに世紀を超えたロングスパンの時間軸の問題でございます。そこでは、科学や新しい技術の開発における、これまでの常識にとらわれない発想の飛躍や転換が必要であると考えます。言い換えれば、本日の副題でもございます、学術科学におけるパラダイムシフトが必要であると言えます。我々京都大学は、率先してそのパラダイムシフトをリードしたい、地球社会に貢献していきたいと考えてございます。その思いを込めて、今回の副題、附置研究所・センターシンポジウムのサブテーマを、「パラダイムシフト——新しい世界を創る京大」と決めさせていただきました。

京都大学は、1897年の創立以来、自由で創造的な研究を貴び、地球社会の調和ある共存に向けて貢献することを基本理念に掲げてございます。新たな知的価値の創造・創出と、それを担う人材の育成を進めております。本学は、今年で創立125周年を迎えます。2017年度に文

部科学大臣から、世界最高水準の教育研究活動の展開が期待されるということで、指定国立大学法人に指定されました。これからも、日本を代表する研究総合大学として、人類の福祉と発展に貢献する成果を出していきたい、発信していきたいと考えてございます。

本学には非常に多くの部局がございます。10の学部、18の大学院研究科、それに加えて、今回の主役である、理学、工学、生命科学、人文社会科学まで幅広く網羅しております、19の附置研究所と研究センターがございます。これら多くの附置研究所・センターでは、国内外の学術研究をリードする、先端的学際的な研究活動を行っております。これまで、ノーベル賞や、フィールズ賞などの受賞者を排出するなど、大きな成果を上げてきました。

また、最近では、異分野間の融合と、新しい分野開拓を目指して、京都大学研究連携基盤を設置しております。それぞれの附置研究所・センターが、独立ではなくて連携協働して研究を進める。そういう体制を作っております。

このシンポジウムでは、この成果を広く国民の皆さまに紹介させていただくために、年に1回全国を回って開催してきました。最近では各地方の中核都市を回るということで、このたび四国地方では初めてとなりますけれども、この松山の地で開催の運びとなりました。

余談ですが、松山は、京都大学の同窓会活動が非常に盛んです。たぶん本学の同窓会の中でも最も熱心な地区でございまして、本来でしたら、ここで京大同窓生の方とも幅広く交流できることを楽しみにまいったのですが、残念ながら、コロナ禍によりアカデミックなディスカッションのみになりますけれども、また機会を改めて松山にお邪魔したいと考えてございます。

本日は、プログラムにもありますように、19の附置研究所・センターがありますと申し上げましたが、全部紹介していると1日では足りませんので、エネルギー、防災、情報、数理解析、フィールド、心、経済、非常に幅広く7人の先生方にお話をいただきます。

私も、この附置研究所・センターシンポジウムには、かつて化学研究所長および研究連携基盤長をしておりました時に10回ほど出ておりますが、いつも短い時間で手際よく、面白くお話を聞けるので楽しみにしています。皆さまにもぜひお楽しみいただければと思います。

パンフレットにも総長挨拶がございますけれども、この愛媛県には、各方面、各分野でパラダイムシフトを起こした多くの優れた人材を出したということで、そこに書いてあります司馬遼太郎の小説の『坂の上の雲』に登場する秋山真之も松山出身で、明治時代に日露戦争等で常識にとらわれない戦術を編み出しています。その親友の正岡子規が、短歌や俳句の世界で革新的な変化を成し遂げたこともよく知られております。また、昨年、地球という複雑なシステムを概念的に理解する方法論を開発したということで、現代の気候研究の礎を築いた四国中央市出身の眞鍋淑郎先生が、ノーベル物理学賞をご受賞されました。このように偉大な先人、先輩を排出されてきましたこの松山の地で、我々の附置研究所・センターシンポジウムを開催できることを、非常に喜ばしいと思っております。

私たち京都大学の研究者は、希望の持てる世界に向けて、新たな地平を切り拓きたいと、多

様な研究領域で日々努力をしております。このシンポジウムを通じて、その一端が皆さまに伝われば非常にありがたく思います。

残念ながら、本日のシンポジウムはハイブリッド開催ということですが、この松山市民会館において、対面でご参加の皆さまにかなりお集まりいただきました。ありがとうございます。それに加えて、オンラインでも多数の参加登録をしていただきました。本来でしたら、この会場いっぱいに来てくださる予定だった方が、ちゃんとオンラインで登録してくださったということで、非常に嬉しく思っております。1日という短いシンポジウムではございますけれども、ぜひお楽しみいただければと思っております。

以上をもちまして、本学を代表しての開会挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いたします。